

# 白根は情報発信基地。 日本一ですよ

話し手 小林芳雄さん  
(新潟県農業会議審議役)

農林水産省は「新農政プラン」の中で法人化の推進を強く打ち出しました。なぜ法人化か、それをどう発展させていくのか、新潟県農業会議の小林芳雄さんにお話を伺いました。

## 生産者の顔が見えるコメ作りが求められている。サービスを考えたい 農業者の意識改革が必要です。

小林さんはお仕事柄、さまざまな農業経営の事例をご存じだと思います。白根市では七月に農業法人会が結成されましたが、その辺からお話を伺いたいと思います。

小林 まずご理解いただきたいのが平成四年に農水省が発表した「新しい食料・農業・農村政策の方向」という、いわゆる「新農政プラン」です。この狙いは三つあって、一つは食料の自給率を高めるとのこと。二つ目はそのための担い手の確保。三つ目は農村の環境づくりです。しかも、担い手の中に初めて「法人」を位置付けたのが大きな特徴です。

小林 今、どこの会社も優秀な人材の確保に躍起ですね。それが産業界で生き残る第一条件です。それに對して農業は、せがれさん、嫁さん、みんなタダ働きだよ。そんなところに優秀な人材が来ますか。

小林 法人は会社です。会社には就業規定、給与、退職金、休日など、人間を大切にすることを決まっています。農業は今まで人間を粗末にしてきた。これからは人権を尊重しなければならぬ。農業就業者の人権を尊重すれば、優秀な人材が集まります。

小林 白根はそういう動きをいち早く農業を事業として経営しないというつもりです。小林 白根市農業法人会、これは何の組織ですか。自分で勉強しようという自己研さん組織ですよ。狙いは優れた経営感覚、優れた経営者能力を身に着けようという一点しかない。これは教えてもらうものではない。ほとんど情報交換しながら、身に付けていくものだ、私は思う。

小林 白根市農業法人会、これは何の組織ですか。自分で勉強しようという自己研さん組織ですよ。狙いは優れた経営感覚、優れた経営者能力を身に着けようという一点しかない。これは教えてもらうものではない。ほとんど情報交換しながら、身に付けていくものだ、私は思う。しかし、農業者だけ集まって情報交換しても駄目なんです。農業がますます発展するためには、生産者と、それを加工し、販売する食料関係の業界の人たちも一緒に、新しい食料のための情報交換をしなければならぬ、意味がないでしょう。異業種交流を目的としたクラブに発展させ、情報交換をすることです。それが白根市農業法人会の最後の狙いじゃないですか。ここに白根の発展があるんですよ。

小林 白根市農業法人会、これは何の組織ですか。自分で勉強しようという自己研さん組織ですよ。狙いは優れた経営感覚、優れた経営者能力を身に着けようという一点しかない。これは教えてもらうものではない。ほとんど情報交換しながら、身に付けていくものだ、私は思う。しかし、農業者だけ集まって情報交換しても駄目なんです。農業がますます発展するためには、生産者と、それを加工し、販売する食料関係の業界の人たちも一緒に、新しい食料のための情報交換をしなければならぬ、意味がないでしょう。異業種交流を目的としたクラブに発展させ、情報交換をすることです。それが白根市農業法人会の最後の狙いじゃないですか。ここに白根の発展があるんですよ。

## 家庭と農場はきちんと分離する。 農業者だけで情報交換したって駄目。異業種とクラブを作るんです。

キャッチしたわけですね。

小林 そうです。法人化した人と、これからのしたい人が農業法人会を結成したのは素晴らしいことです。

小林 コメは、作りさえすれば良かった。しかし、これからはそうはいかないでしょう。新農政プランでは今後のコメ管理について「市場原理、競争原理の一層の導入を進める」としている。そして生産者の創意と工夫を発揮して、消費者のニーズにこたえなさいといっている。

小林 今まではコメを生産するだけで、売ることさえなくて良かった。極端にはコメの形さえしていれば、極端にでも、等級さえ合格すれば良かった。買ってくれるのは国です。

小林 今までは競争原理で、消費者と顔の見える取引をしないといいう。作るだけじゃ駄目だ。加工し、販売し、サービスを考えようということですよ。サービスは無制限です。それを考えるのが、これからの経営者なんです。今までの農業経営者とは違う。だから農業者が意識の改革をしていかなければならないんです。意識改革をするには、どうすれば良いでしょうか。

小林 例えばタイムレコーダーで勤務する農業なんて考えられませんでした。

## 県内の農業者の青色申告会はずべて白根のまねですよ。それが全国に波及しているんです。

小林 青色申告会を作った。法人会が異業種とのクラブを作り、情報を得る。得ると同時に情報の発信源になろうという意欲を持っている。

小林 白根市は昭和六十二年からそれをやっている。既に約二百人の組織になっている。彼らはお嫁さんに口座振り込みで給料をやっていて。こんな所がほかにあります。日本中に月給をやっていて農家はたくさんあるが、口座振り込みでやっているのは白根だけです。一番喜んだのはお嫁さんです。これは素晴らしい。こういうところから、家庭と農場とは違うという意識が出てくるんですよ。家庭と農場とは違う。今までは家庭も農場も一緒だった。茶の間が農家の事務所だった。だけどそこは生活の場ですよ。家庭と農場と区別できなかった。どんぶり勘定です。法人にするということはその意識改革ですよ。その第一歩が青色申告です。まず家庭と農場を離しましょう。

小林 青色申告会を作った。法人会が異業種とのクラブを作り、情報を得る。得ると同時に情報の発信源になろうという意欲を持っている。その一つが農業者の青色申告会です。白根市は昭和六十二年からそれをやっている。既に約二百人の組織になっている。彼らはお嫁さんに口座振り込みで給料をやっていて。こんな所がほかにあります。日本中に月給をやっていて農家はたくさんあるが、口座振り込みでやっているのは白根だけです。一番喜んだのはお嫁さんです。これは素晴らしい。こういうところから、家庭と農場とは違うという意識が出てくるんですよ。家庭と農場とは違う。今までは家庭も農場も一緒だった。茶の間が農家の事務所だった。だけどそこは生活の場ですよ。家庭と農場と区別できなかった。どんぶり勘定です。法人にするということはその意識改革ですよ。その第一歩が青色申告です。まず家庭と農場を離しましょう。

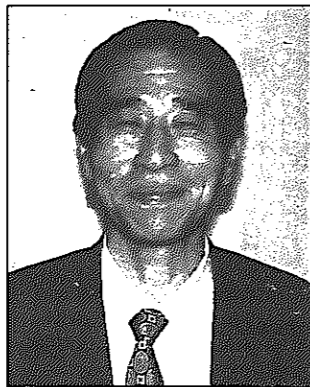
小林 ただ家族で働いていれば良かった。しかしこれからは大勢の力が必要です。経営は緊張しなければなりません。緊張感他人の雇用によって生まれます。雇用関係は管理です。管理の中から秩序が生まれます。そこで組織が発展します。

小林 市場原理というのは、勉強した人の勝ちなんです。そのためにはみんなアイディアを出し合って、創意と工夫で生産するんです。県内の優秀な農業組織はともせず、毎朝ミーティングをする。これが大事です。ここから良いアイディアが出てくる。新農政プランの中には「優れた経営感覚、優れた経営者能力」という言葉が九回、「地域に即した創意と工夫の発揮」という言葉が八回出てきます。それだけ国はこの点に力を入れていっているんです。

小林 うと青色申告をする。そういう人たちが集まって青色申告会ができる。そして法人の設立ができる。それからやると、農業法人会ができるんです。ものには段階があるんですよ。よそで白根のまねをしようとしても、できないんじゃないの、段階を踏まないと駄目だから。今、県内で青色申告会を作っている所が四十数カ所あるけれど、それは全部白根のまねですよ。規約、事業計画、みんな白根のパターンです。それが県内だけでなく、関東信越国税局管内に波及している。全国に波及している。

小林 そこに全国に先駆けて農業法人会ができた。これは大変ですよ。白根は情報発信基地ですよ。日本一です。白根が農業経営という面から全国に情報を発信しているという、素晴らしいお話、うれしく思います。白根の農家戸数が二千三百三十六戸、そのうち農業法人会に加入しているのは五団体五個人です。厳しい農業情勢の中で、白根の農家はさまざまな事業展開を模索し、実践しています。その中の一つの手段として法人化を選択した皆さんに大いに注目し、地域農業活性化の起爆剤になることを期待したいと思います。どうもありがとうございます。

小林 うと青色申告をする。そういう人たちが集まって青色申告会ができる。そして法人の設立ができる。それからやると、農業法人会ができるんです。ものには段階があるんですよ。よそで白根のまねをしようとしても、できないんじゃないの、段階を踏まないと駄目だから。今、県内で青色申告会を作っている所が四十数カ所あるけれど、それは全部白根のまねですよ。規約、事業計画、みんな白根のパターンです。それが県内だけでなく、関東信越国税局管内に波及している。全国に波及している。そこに全国に先駆けて農業法人会ができた。これは大変ですよ。白根は情報発信基地ですよ。日本一です。白根が農業経営という面から全国に情報を発信しているという、素晴らしいお話、うれしく思います。白根の農家戸数が二千三百三十六戸、そのうち農業法人会に加入しているのは五団体五個人です。厳しい農業情勢の中で、白根の農家はさまざまな事業展開を模索し、実践しています。その中の一つの手段として法人化を選択した皆さんに大いに注目し、地域農業活性化の起爆剤になることを期待したいと思います。どうもありがとうございます。



こばやし・よしお

新潟県農業会議審議役、県農業経営者協会・県稲作経営者会議事務局、全国農業新聞新潟・北信越版編集局長、出雲崎町在住。趣味は日本ヤスを持って海に潜り、魚と勝負すること。良い顔とは仏様の顔、それは生産者の顔であると話す1次産業のファン。

